

近江八景：堅田落雁（かたたのらくがん）

琵琶湖の西岸にある片田は、浮御堂で有名です。この仏教建築物は、湖の上に高床式に建てられた木造の東屋で、水の上に浮かんでいるように見えます。何世代にもわたる僧侶や訪問者が、

この場面には漁師の姿が多く描かれていますが、歌川広重（1797-1858）の木版画の保永堂版には、夕暮れ時に漁師が岸边に向かって航海している姿が描かれています。浮御堂は見えますが、水辺から見た残りの陸地はほとんど影になっており、また下りてくる雁がオレンジ色の空に小さな黒い形の集合体となって描写されています。

浮見堂は台風の被害が大きかった 1937 年に再建されたものですが、当時のままののどかな雰囲気を保っています。地元の漁師たちは今でも大漁を求めて湖に向かい、また時には夕空に野生の雁の群れが見られることもあります。このイメージは、今でも地元で作られている「落雁」という伝統的な甘味の創作につながっています。